



曲屋全景。母屋には蚕の飼育に使った越屋根が残っている

柱や梁などに懐かしさを感じると思います。約20年間、曲屋を守ってきた曲屋管理組合組合長の鈴木圭子さんは「歴史を肌で感じ、いろいろな思いを膨らませてほしい」と話します。

一方、南郷地区は高齢化が進み、曲屋の後継者不足が課題となっている中、今年1月、地域おこし協力隊として東京都板橋区から古川実加さんが移住。誘客や周辺地域の活性化に協力しています。「曲屋の一員として魅力を伝え、人と地域の温かさを伝えていきたい」と意気込みます。

今年約20年ぶりに、屋根の改修作業を行う予定で、傷んだ表面部分を張り替えます。鈴木さんは「この地域の文化と歴史を伝え続け、古民家のある里山風景を後世に残せたら」と笑顔を浮かべます。



利根町南郷地区の「南郷の曲屋」と呼ばれる旧鈴木家住宅。2004年に市重要文化財に指定され、そば打ちなどの体験もできるかやぶき屋根の古民家です。関東ではめずらしいと注目される造りや、曲屋を守り、人と地域とのつながりの温かさを伝えていく人々たちを紹介いたします。

▶20年間守ってきた曲屋を振り返ると同時に、古川さんなど若い人に地域の伝統を引き継いでほしいと胸の内を語る鈴木さん



▼室内から見たかやぶき屋根。竹で骨格を作り、屋根の形に沿ってかやを覆っていく



▲稲の収穫を感謝し、翌年の豊穰を祈って稲刈り後のわらを束ねたわら鉄砲で「十日夜」と呼ぶ。子どもたちが作物にいたずらをするモグラを追い払うために使ったといわれている



特集

かやぶき古民家 歴史伝えて

母屋はかやぶき屋根で、東北地方の岩手県など寒冷地域に多く見られるL字型に張り出した曲屋形式。土間から突出したL字の部分は当時、馬小屋として使われ、いりりからの暖気が馬小屋へ流れ込んで馬を温めていました。現在もいぶして建物の傷みを抑えたり、いりりを囲んで交流を楽しんだりと活用しています。

鈴木家の祖先は熊野神社の神官を務め、紀州（現在の三重県）より当地に落ち着き、日影南郷村の原形を築きました。主に養蚕をなりわいとし、母屋2階に蚕室を構えていました。蚕室



の風通しを良くするために屋根に設置された越屋根は現在も残り、絹産業に関わる建造物として「ぐんま絹遺産」に登録されています。

鈴木家は代々名主や政治家を送り出していたことから、役人や文化人などの滞在施設としても使われ、座敷に高低差をつけた書院造りになっています。最も高い上段を「オクノデイ」と呼び、奥座敷に当たる「奥の殿」からなまったものといわれています。

曲屋に訪れる多くは、都市部やバスツアーの団体などで、いりりでパチパチと燃える薪、太くすすりとした



曲屋の入口の引き戸から古川さんがお出迎え。縁側は雑誌撮影などのメイン写真として使われることが多い



▲敷地内には4つの蔵があり、外壁はしっくい土を混ぜて塗り固められている。農具や民具などを展示



▶オクノデイに飾られた掛け軸などは、当時鈴木家と交流のあった文化人から贈られたといわれる